

2021年3月

## 令和2年度静岡市協働パイロット事業

### 次郎長生誕200周年事業を通じたエリアブランディングに向けて 業務完了報告書

#### ミナトブンカサイ実行委員会

#### 概要

静岡市清水区にある清水港は、明治時代から国際的な物流港として栄えてきた。しかし、近年においては清水港の埠頭のひとつである「日の出埠頭」は、物流拠点から国内外の豪華客船等を受け入れる埠頭へ変わりつつあり、人々による賑わいをもった空間へと変えていくことが必要とされている。

これまでに私たちは、2011年から日の出地区周辺のまちづくり、および伊豆石が用いられている倉庫群等に関する調査研究<sup>\*1,2,3</sup>をしてきた。その後、当エリアにおける倉庫群やストリートの活用に向けたシミュレーションをするために、計5回にわたりテーマを設定した「ミナトブンカサイ」を実施し、周辺事業者、市民、行政と連携関係を広げてきた。近年においては、これまでの調査を踏まえて、清水港周縁の特徴的な地域資源を「ブランディング・エッセンス」<sup>\*4</sup>として、これらの要素を活かした地域ブランディングの実践的活動を実施してきた。<sup>\*5,6</sup>

ミナトブンカサイ実行委員会は、2020年度における事業で、下記2点を目標として活動した。

1. ブランディング・エッセンスを活かした「エリアブランディング」
2. 活動を踏まえた「関係者プラットフォーム」の発展

2020年度は、次郎長生誕200周年にあたる年であるため、「次郎長と港を活かした清水活性化協議会」と連携して、「旧川湊エリア（次郎長エリア）および日の出地区を対象として、次郎長と清水港を活かした文化・産業・観光等のまちづくりの活性化を図ること」を協働したいと考え、2019年度までに活動してきたブランディング・エッセンスを活かした「次郎長」と「Teaism」に関わるコンテンツ化の発展を計画した。

当初は、次郎長商店街通りのマップ増版のほか、外国人や市民を客対象とした街歩きツアーによる次郎長商店街の活性化、お茶を用いたストリートカフェによる賑わいづくり等を計画したが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、訪問客を受け入れることはもとより、スタッフの移動も困難になり、リアルな空間でのイベントは不可能になった。さらに、2021年1月に予定されていた、次郎長生誕200周年記念事業「次郎長が

夢見た清水港」が直前になって中止となり、それまでに準備していた展示物や制作物をリアルな空間で展示し、体験してもらうことはできなかった。

このような状況から、今年度は上記2目標の枠組みは維持しつつ、内容を見直し、仕様書では以下の業務を掲げた。

(1) ブランディング・エッセンスを活かした「エリアブランディング」

- A. 情報発信サイトの作成
- B. 次郎長商店街通りのマップ改訂版作製
- C. 次郎長ブランディング・デザイン
- D. 「港でお茶」マイクロツーリズムプラン

これらについては後述する。

(2) 「関係者プラットフォーム」構築のための全体会議実施

2020年度はミーティングを全てオンラインで行った。「関係者プラットフォーム」となるミーティングは、静岡市経済局海洋文化都市推進本部と連携して次のように実施した。

2020年11月、12月 次郎長と港を活かした清水活性化協議会

主として2021年1月に予定されていた、次郎長生誕記念事業「次郎長が夢見た清水港」の企画について、「エリアブランディング」と関連して内容を検討。

2021年2月 静岡県清水港管理局

主として今後の清水港の展開等について、さまざまな観点から意見交換。ここから県内他地域での伊豆石の蔵の活用団体や、茶問屋の倉庫・茶箱の活用団体などと新たな連携が生まれた。

以下、(1)「エリアブランディング」について前年度採択分の成果も踏まえ報告する。

A. 情報発信サイトの作成

Web上での発信を主とするHPの制作と、そのコンテンツとなる動画等の作成を行った。URLは次の通りである。

<https://www.ynu-minatomachipj.com/>

内容の報告は上記サイトをもって割愛する。この内容は順次更新していく予定である。

B. 次郎長商店街通りのマップ改訂版作製

## ・清水次郎長と港の関係性について

清水次郎長（本名：山本長五郎）は、江戸時代末期（1820年）に現在の清水区美濃輪町で生まれた。幼少期から腕白、暴れん坊で、賭け事を好み侠客となった。その後26歳の時に大きな喧嘩を仲裁したところから一躍有名になり、各地の親分をまとめ上げ「海道一の大親分」として知らない者がいないほどのネットワークを広げていった。その後、時代が江戸から明治に変わる1868年、49歳の次郎長には転機が訪れた。浜松藩の家老から「街道・清水港警護役（現在の警察署長のような役）」を任命されてからは、社会貢献に関わる活動が増えていき、富士裾野における茶畑の開墾や、英語塾の開講、海運業や石油開発など実業家としての活動を歩んでいった。

その頃の清水には、巴川沿いに川湊があったが、特産品のお茶は清水湊から横浜港を経由して輸出していた。そこで次郎長は、清水港から海外へと直接輸出することによる販路拡大の必要性を感じ、廻船問屋の経営者を説得し、蒸気船が導入できる波止場を建造することに力を注いだ。<sup>7</sup>その後、次郎長は港が完成した姿を見ずして明治26（1893）年に74歳で亡くなったが、清水港は明治32（1899）年に諸外国と直接貿易ができる開港場に指定され、明治42（1909）年には茶の輸出高が日本一となり、茶の輸出港としての名を広めた。

## ・次郎長マップと次郎長ツアー

2019年度業務において、清水次郎長の生家や次郎長が晩年に開いた船宿「末廣」をはじめ、その周辺における次郎長にまつわる史跡や、特徴的な建築や場所をマップ上に記し、それに併せて「次郎長通り商店街」における特徴的なローカルフーズとして、シーチキンおにぎり、いちご大福、黒はんぺんのおでん等の名物を紹介した「次郎長マップ」を作成した。近年、清水港にはクルーズ客船が来航するため外国人および日本人観光客に向けた、英語版と日本語版を用意した。2020年度には、この改訂版を発行した。（図1）

また、2019年度には、これらのマップを元に、学生や大学教員、および地元団体・企業との連携によるガイドで「次郎長ツアー」を実施した（写真1）。さらに、地元企業との連携により、当マップを元に音声版ガイドの制作も行われ、日常的にウェブサイトを通じて音声ガイドを聴きながら、次郎長界隈を巡ることができるようになった。



図 1. 次郎長マップ 日本語版 / 英語版 (2019年度 初版 / 2020年度 改訂版)

### C. 次郎長ブランディング・デザイン

#### ・次郎長を描いた「蘭字ラベル」による茶商品のパッケージデザイン

2020年度は次郎長が生まれてから200年目にあたるため、生誕200周年記念事業の一端として、次郎長の晩年における清水港にまつわる功績を表現した蘭字ラベルと、お茶のブランディング・デザインを行った。

パッケージのラベルには、茶の輸出用に使われていた茶箱に貼られていた「蘭字ラベル」の様式を用いて、清水港ならではのデザインの特徴も登用している。具体的には、ラベルの縁において二重線によるラインが描かれている点が、他港の蘭字ラベルと比較して特徴となっている。その他にも、該当地域における特徴的なモチーフとして次郎長を挙げ、茶を輸出するために川湊から国際貿易港を目指したことをイメージさせる絵柄や、「次郎長茶」という商品名や「Shizuoka Teatism」というコンセプトの蘭字（アルファベット）を、装飾的にデフォルメしてデザインすること等が特徴となっている。2019年度に初案パッケージ、2020年度に新案パッケージを作成した。（図2,3）



図2. 次郎長の後世の人生を描いた「蘭字デザイン」によるイメージ



図3. 蘭字デザインによる茶商品のパッケージデザイン

### D. 「港でお茶」マイクロツーリズムプラン

#### ・次郎長が夢見た風景

図4は、茶の入った茶箱を清水港から輸出する際の状況を撮影した当時の写真である。清水次郎長は清水港が国際貿易港となる前に亡くなったため、このような風景を実際に見ることができなかった。

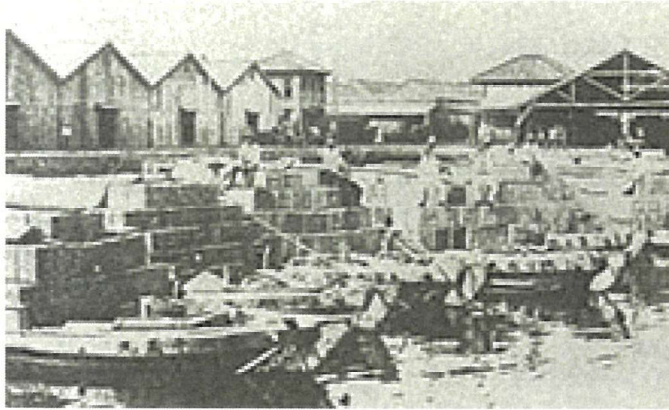


図 4. 港に輸出用に積まれた茶箱の古写真 (昭和初期)

出典: 「蘭字-日本の輸出茶ラベル」 清水港湾博物館 (フェルケール博物館), 2017. 7

次郎長生誕 200 周年記念事業におけるメインテーマは、「次郎長が夢見た風景」であり、写真 4 に映し出された風景は、まさに次郎長が夢見た風景の一端であったろう。このような風景を、現在の清水港において一部再現できないかと考えた。

そこで COVID-19 の感染収束期に、段階的にイベントを再開できるように、街路・空地等の屋外でも使えることを想定し、茶箱に着想を得た「チャバコシカケ」を制作した。

#### ・ 既存茶箱の実測

現在、茶箱の製作所は静岡県内においても数軒と言われており、近年における茶箱のリメイク・ブームにより、生産が追いつかないほどの状況となっている。静岡市内で一軒ある茶箱の製作所より、一つの茶箱を購入し、その茶箱の実測を行うことを通じて、茶箱の構成・構法を確認した。材料は杉材が用いられている。(図5)

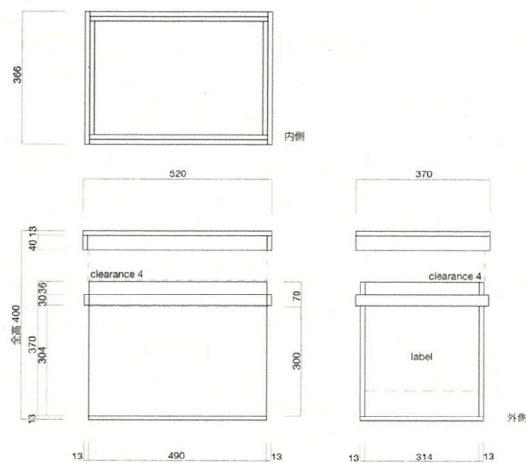


図 5. 既製茶箱の実測図



図 6. 茶箱の製作

### ・茶箱をベンチとして活用する「チャバコシカケ」プロジェクト

実測を踏まえて、ベンチとして活用するための試作品を製作した。そして、試行として茶箱を清水港に持っていき、「次郎長が夢見た風景」に向けたプロモーション写真を撮影し、ベンチとして活用するための課題点を挙げた。(図6,7,8,9)

港においてベンチとして茶箱を活用していくための課題点としては、①耐荷重性、②雨に対する耐腐食性や劣化性、③強風に対する耐風性などが挙げられる。耐荷重性については、(一般的な体重の)一人が座る分には問題はないが、2~3人が座るベンチにするためには、材料の厚みを増すことや茶箱内の補強をする必要がある。雨に対する耐腐食性や劣化性については、地元で採れるオクシズ材の杉板を用いる場合に、材の厚みや塗料、および腐食や劣化に耐久する設置期間を吟味する必要があるだろう。耐風性については、蓋部を本体に固定し、本体自体も床面に固定する必要がある。そのため、今後においては上記課題を克服するための試作を重ね、設置期間を設けた社会実験を企画実施するなかで、管理体制についても検討していく必要がある。



図 7. 8. 「次郎長が夢見た風景」に向けたプロモーション写真



図 9. 茶箱をベンチとして活用する「チャバコシカケ」プロジェクト

### まとめ・今後の可能性

2020年度はCOVID-19の影響により、次郎長生誕200周年記念事業のメインイベントが2021年に延期され、準備していた展示(図10)や各種事業等についても継続することになった。茶箱を用いたチャバコシカケプロジェクトについても、連携する行政・企業・団体と

情報交流をしながら社会実験を試みていくことで、「次郎長が夢見た風景」が一部でも蘇るよう活動を推進していきたい。

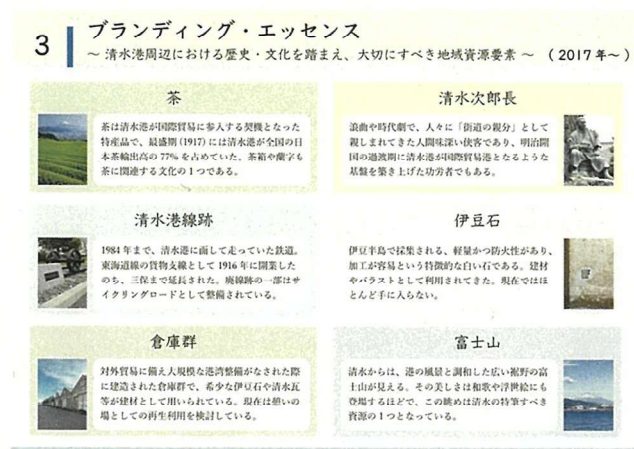


図 10. 次郎長生誕 200 周年記念事業のメインイベントのための展示パネル

参考文献：

- \*1. 大森文彦・黒瀬武史（東京大学）：「清水港における港湾成立の歴史と歴史的資産に関する研究」, 日本建築学会大会学術講演梗概集（都市計画）, pp. 753-754, 2012
- \*2. 萩原拓也・黒瀬武史（東京大学）：「清水港日の出地区とその後背地域の戦後における変遷」, 日本建築学会大会学術講演梗概集（都市計画）, p. 745-746, 2013
- \*3. 大森文彦・黒瀬武史（東京大学）：「遊休内港地区の斬新的再生に関する研究 - 顕著な歴史的価値を有さない港湾施設を活用した事例を対象として -」, 日本建築学会計画系論文集 79 (697), p. 701-709, 2014
- \*4. 志村真紀・萩原拓也・土屋和男・黒瀬武史・一ノ瀬彩：「清水港周辺におけるブランディング・エッセンス」, 日本建築学会大会建築デザイン発表会, p. 62-63, 2018
- \*5. 志村真紀・萩原拓也・土屋和男・黒瀬武史・一ノ瀬彩：「清水港日の出倉庫街におけるブランディング・リノベーションの提案」, 日本建築学会大会建築デザイン発表会, p. 286-287, 2019
- \*6. 志村真紀・萩原拓也・土屋和男・黒瀬武史・一ノ瀬彩：「清水港を拠点とした地域ブランディング - SHIZUOKA TEAISM とミナトブンカサイ-」, 日本建築学会大会建築デザイン発表会, p. 38-39, 2020
- \*7. NPO 法人地域づくりサポートネット 監修：「次郎長生誕 200 周年記念事業『清水の次郎長物語-次郎長が夢見た清水港-』」, 静岡市, p. 1-66, 2020. 11